

川柳 さいたま



平成28年
12月号 (No.685)

日川協加盟

巻頭言

我慢とくせいのこと

願法みつる

世の中には、信じ合い愛し合って当然の者同士あるいは家族・グループ同士が、疑いという不信感の故に心を隔て、苦しみ合う場面が多すぎるのではないか。

縁という丸みに、疑心暗鬼という楔を打ち込む鬼は、心の弱さに攻めてくる。人間は所詮自分が可愛いから、正しいと信じ込み、自我を無視できない。自己の感情を冷静に見つめて、抑え耐え忍ぶことがなんとも苦痛なのである。つまり堪忍ならず、我慢できずに相手を悪と見なししてしまう。自らが鬼になってしまう。

所が仏教語で「我慢」とは、高慢、自惚れ、驕り高ぶりと言うことだとか。我意を押し通す人、即ち強情者と言うことらしい。なぐんだ、逆じゃないか。

いま個人や組織、国家の関係を見廻しても、ハッピーな有縁の姿は、残念ながら見出しにくい。しかし自己に執着する欲や驕りや昂ぶりで相手を責めても、問題は解決しない。思い切って相手を「我慢」の鬼と見立てれば、肩の凝りもほぐれてくる。仏性が湧いてくる。

川柳という有縁の世界でも、上手達人には取返して逆らわず、自らは下手凡俗の身の程と承知さえすれば鬼にもならず済む。我を通すことに固執すれば自分が鬼になっってしまう、傍目には迷惑、自分も泣くだけだ。

日日是好

願法みつる

我慢とは所詮強情者ならん

イエスノーだけを問うから角が立つ

凡俗を晒してヒトの美しさ

一炊事二で掃除して三は寝る

酔い痴れて利休鼠の混合酒

日日是好時時も是好の陽が沈む

美しい柳眉に角がよく似合い

プラトンと孔子の対話まだ続く

悲喜劇の大団円へUターン